

新野球いろはかるた

終戦後の45年11月、プロ野球は「東西対抗戦」を開催し復活、23日神宮、24日桐生、12月1日、2日西宮で計4試合が開催されました。新たにプロ入りした大下弘選手（セネターズ）が15打数8安打の活躍を見せました。

翌46年からは8球団によりペナントレースが再開されます。大下選手はそれまでのシーズン本塁打記録10本を大幅に更新する20本を放ち、本塁打王を獲得。47年には戦前からのスター選手である川上哲治選手（巨人）が「赤バット」、大下選手が「青バット」を使用し、本塁打を量産し、大きな人気を集めました。復興に向かい始めた日本社会の中で、ホームランの魅力がプロ野球人気を高めたといわれています。

今回紹介するのはこの時代の資料、「新野球いろはかるた」です。読み札、絵札がいろは

順に44枚ずつあり、当時のスター選手である大下選手が描かれた箱に入っています。南海時代の別所 昭（のち穀彦）投手が登場していることなどから1948年頃のものと思われます。絵札にはカラフルに着色された人気選手が描かれ、読み札には「まちかまへ大下するどいバツテング」、「むちゃくちゃに振って青田はヒットする」など選手の個性が生き生きと表現されています。テレビもなくカラー写真もまだ普及していない時代に、当時の少年ファンにプロ野球選手の魅力を伝えていた貴重な資料と考えられます。

1947年には日本野球連盟（現NPB）とは別のプロ野球リーグである「国民野球連盟」ができるなど（同年限り）、野球の人気が高まるにつれ、プロ野球に参入を希望する企業が増えていきます。1949年のシーズン終了後に

は、従来の1リーグ8球団制から2リーグに分立することが決定、セントラル野球連盟（セ・リーグ）、太平洋野球連盟（パ・リーグ）が誕生し、1950年にはセ8球団、パ7球団による2リーグ制がスタートしました。



公益財団法人 野球殿堂博物館 学芸員 関口貴広